これから活動の強化へ

青年部 劇出演でつかんだ自信

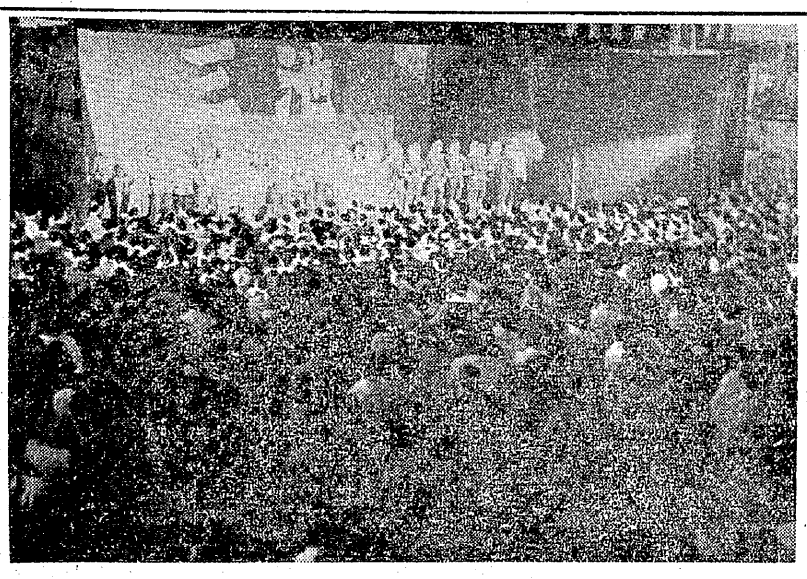
この十四日夜青年部は、去る組合創立記念祭典のなかで上演された〝創作合唱詩劇、三池のたたかい〟に出演した部員に集まってもらい、相互批判を行なったが、熱心な討論の末「とにかくこの劇に出演したことで、身体を通して、何でもやる気をもちさえすれば、やれるもんだとの自信がもてた。この機会に青年部としての活動を強化するにはどうするか、の討論をまき起こすべきだ」との、固い申し合わせを行なった。

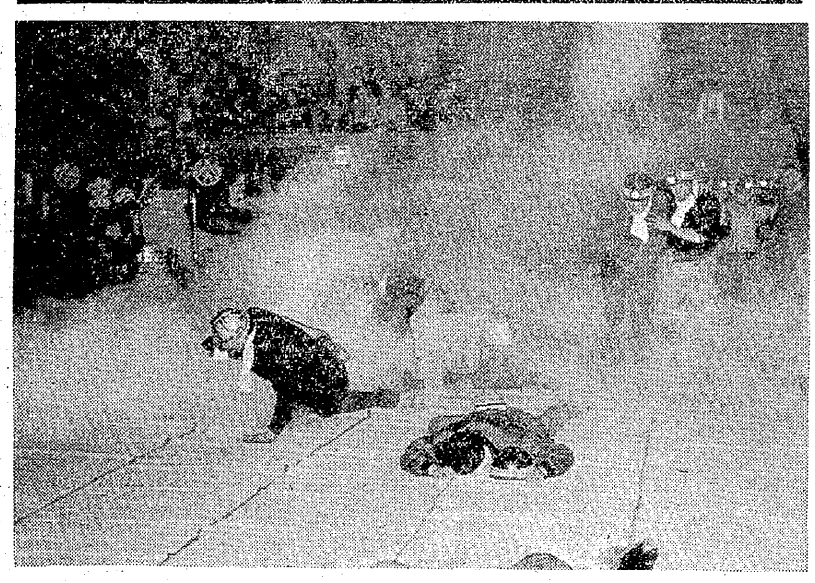
批判会には、何は措いても職場や地域からあの劇に思いのほかの絶讃が寄せられたことが報告された。かえって新制作座のフエスティバルに出演する娘たちが、あの劇に感動のあまり、舞台裏で声をあげて泣いていたのが見られたというし、また大爆発の犠牲者の遺族たちは、夫が息子が、こげんして死んでいったつか、と改めてあふれる怒りの涙をふいていた、ということだった。

また「過去のことを、いままではぼんやり見てきたが、あの劇を見てこれではならんゾと覚悟を固めなおした」という仲間もいた。

闘う三池の再演めざして

いずれにせよ、三池のたたかいは、内外の要望にこたえ春闘うたごえ大会に再演されるが、青年部は部の活動を強化する上での努力と共に、とりあえずあらゆる問題を克服して、あの劇を成功させるためがんばることになった。





写真上は盛会だった創立記念祭典。下はその日上演された三池のたたかいの一場面。

私の書棚

わが闘いの記録

前総評議長 太田薫著

宮浦支部 堤 玉枝

太田さんといえば、毎年行なわれる春闘を盛り上げる春闘相場を作られることで有名でもあるし、ラッパを吹かれることでも有名となっているが、その太田さんが相手方に無気味な圧力を与えるのは全体の労働者の共感にささえられているからで、吹き方の上手下手ではない、と説明されている。

総評議長八年、太田さんはいろいろと闘争を指導し経験したが、やはり心に残るものは宇部窒素の首切り反対闘争、新日窒水俣の安定賃金反対闘争らしく、「これらまれた〝炭掘る仲間〟の歌は、私の一等すきな歌で、いまでも酔ってあの歌を歌うと涙がでる」「息詰まるようなホッパー決戦をひかえて、藤林あっせん案がだされたが、千二百人の首切りを認めるあっせん案は、絶対認めずたたかいを続けようとする組合員・オルグを説得、闘争を終結したが、就労後七年たった三池では不屈のたたかいが続けられ、全国の労働者によって三池の火は力強く燃え広がっている」。

この本によると、太田さんはこれから「中小企業に働く労働者や未組織労働者を組織し、賃金格差をなくし、総評の力を下から盛りあげる原動力になってゆきたい」というが、やっぱり大衆とともに前進するのが太田さんのほんとうの姿だとつくづく思う。

補償勝ち取るまでは……

奴等に責任取らせぬ限り死んでも死に切れぬ

遺族 溝口生松

昨年福岡地検・福岡高検はともに、遺族の告訴に対して「三池の爆発は、二年半にわたり調査の結果原因不明。証拠不十分」ということで不起訴にしました。検察審査会も、審査請求に対して「福岡地検の不起訴は相当である」という誠に不誠意極まる回答を致しました。

とくに福岡高検は、殺人罪は公訴時効期間が十五ケ年だというのに、わずか二十七日の短期間で、私等告訴人からはただ一度の調書も取らず、簡単に不起訴を発表しました。私はこの通知を受け取ったときに、法治国家でありながら法律はなんのためにあるのかわからなくなりました。

地検は私等遺族の抗議に対して「僕等は三井から給料をもらっておるのではない、国家の検察です」といったが、一体なにを調査したのか。なぜ、三井の幹部を逮捕して取り調べなかったか、といいたい。

人の命は地球よりも重いというのに、その尊い命を、あの真暗で逃げ場のない坑内でガスを吸わせ四百五十八名も殺し、その上八百五十名をガス中毒患者にしながら会社は勝手にガスを吸って勝手に死ねと、責任を取らない。それどころか、その当時の現地幹部は本店に栄転し、常務とか相談役とか最高の地位に進級している。そして無罪ということは、われわれ遺族はどうしても納得できない。生き残った親や妻や子として、奴等に責任を取らせるまでは死んでも死に切れない思いです。

また労働省は昨年十月、CO特別立法を作るとの国会での決定にもかかわらず、CO患者に対する補償打ち切りを通知しました。宮島さん（現在熊大病院に入院中）のお母さんが、「三年間も意識不明で、言葉もわからず苦しんでいる者がいるのに、三井の幹部は血も涙もない」と話されたことがあります。

幼い子どもを、この寒中朝六時半ごろから、無理に走らせて託児所に連れて行き、夕方は暗くなった夜道を幼い子の手を引いて帰る可愛想な遺族もいるのに、三井の幹部は少しは解っているでしょうか。

遺族が働いている工場では、朝八時から夕五時まで、中食休みの四十五分の外は連続作業で、あれから三年たった現在、お母さんたちは身心ともに疲労しております。万一、そのお母さんが床に就くような重病にでもなれば、それこそ家族はどうなるでしょうか。遺族年金の繰り上げ支給と、CO補償だけは勝ち取らなければ、生きてゆけません。四月の統一地方選挙に勝利して、CO特別立法と遺族の生活補償を勝ち取るまで、ともに頑張りましょう。

× ×

わが家の議長さん(3)

いつかは……カラーテレビも

四山福社 近藤さん一家

▼…ある日突然に、四山社宅百八棟のハモニカ長屋の一角に住む近藤三男さん（四十二才、四山鉱の払採炭工）のもとに、一台のカラーテレビがもちこまれてきた。「ぜひ買ってください。二―三日置かせてもらいますけん、カラーテレビがどんなものか、どうぞ見てください」――業者はそういって帰っていってしまった。

残念ながら「よし、買ってやろう」ということにはいかない近藤さんの家のこと、この一台のカラーテレビは波乱を起こさずにはいなかった。

近藤さん一家の家族構成は、大黒柱の近藤さんに奥さんのよし子さん（三十九才）、ひとり娘の美鈴さん（中学一年）、ひとり息子の義弘君（小学五年）の四人。さっそく、近藤さんが文句なしの議長となっての家族会議となった。

議長　このカラーテレビ、返すのも惜しい気がするが、どうするかな？

義弘君　ボクは買ってもらいたい。

美鈴さん　私は買うことに反対だな。カラーテレビ買うお金があるくらいなら、家を建てる方が先。

奥さん　ゼッタイハンタイ。何もかんもなか。

議長　そんなら……。

という次第で、くだんのカラーテレビは近藤さん宅に定着することなく、姿を消していったのだった。

▼…この話、実は昨年暮れのことである。取材のため同家をたずねたこの十二日の夜、「おい義弘君、カラーテレビで何を見たかったのかな？」とたずねたら、「ひょっこりひょうたんじま」ときた。「あれがカラー放送だもんですから…」とは、そばからお母さんのささやき。さぞ見たかったろうに……そう思いながら「買えなかったことを、いまどう思っている？」と聞くと、義弘君は「どうも思ってない」と、くちびるを一文字にかみしめて大見得を切った。たずねたその夜、手はじめに「ボクの名前は？」と聞いたのに「ヨシヒロ。セイギ（正義）のギ（義）に、ユミへんのヒロ（弘）」と、まずこっちのドギモを抜いたこの炭鉱労働者の息子の、どこまでたのもしいことか。

▼…ともあれ近藤さんが四山福祉三分会の万年分会長（近藤さんは、こういう）で、奥さんのよし子さんが日本婦人会議所属の活動家というこの家。他の例にもれずそこから生じてくる問題は多い。たとえばその夜、「夫婦ゲンカをやめてもらいたい」と、美鈴さんの遠慮勝ちな口から出た要求がその一つ。

「ほほオ、こちらでもやりますか」と聞くのに、テレながら頭をかくばかりの近藤さんを見やって、奥さんのよし子さんは顔を赤らめていうのだった――。

「うちの人はもう、長い間地域の分会長をしてきているでしょう。だから、なにかにつけ家のことをかまってくれなくなるとですよ。そこでつい……。ばってん、その私も日本婦人会議の会員でしょう。つい、家をそとにすることがあるとですよ。ですけん、私がやかましゆういうと、この人がハラかいて『オレがオレなら、お前もお前だ』ということになって、ジャンジャン……」。

▼…そのよし子さんはいま町にビニールの袋はりの仕事にでかけ不足勝ちの家計をけんめいにささえているが「将来美容師になって女の人々の髪をきれいにしてやりたい」という美鈴さんと「テレビ・マンガのウルトラマンのような正義の人間になりたい」という義弘君が、七輪をおこしたり、炊事をきりもりしたりしながら、とかく両親が留守勝ちな家庭を守っている功績も、見のがしてはならない。その胸に「いつかはカラーテレビを……」の思いがうずいているだろうが、この二人、さすがに「日曜日だけは、お父さんとお母さんのどちらかが、家にいてもらいたい」とうったえずにはいられない。さて、あれといいこれといい、たたかう一家の心を一層強く結ぶためにも、組合活動をやっている仲間にぜひ考えてもらいたい問題ではなかろうか。